



校長室だよりはHPに不定期連載しており、内容により全校あるいは学年単位で保護者あて配布もしています。

○台湾2

台北では古いエリアにある迪化街^{でしかがい}⇒

5月16日の山陰中央新報に「台湾からニーハオ！」という記事がありました。迪化街に雑貨店を開いた日本人女性が、たくましく暮らす台湾の人や、活気ある町の表情を伝える連載です。

その記事の中に、第8号で触れた「台湾の人はやさしい」という印象が私だけではないと思ったところがありました。作者は、「台湾人は情が厚く、自分が正しいと思うとちゅうちょなく突き進む」と評されて

います。台湾では、電車で人に席を譲るのはあたりまえで、作者の息子さんが新生児の頃、子連れで電車に乗った時ひと固まりの客が一斉に立ち上がったそうです。すぐ降りるからと断っても、「あんたのためじゃない」と腕まで引っ張って座らされたそうです。それは、自分にいい気分を充電して去っているようであっても、決して恩着せがましくなかったそうです。こうした「小さな善行」が、台湾では人から人へと伝染していき、見知らぬ人から受けた親切をどこかで返したくなっていくのだと書かれていました。

同じようなことをカナダで経験したことがあります。バンクーバーで路線バスに乗った時、年配の方が乗車してこられ、バスに乗っていたほとんどの人が一斉に立ち上がったのです。なにが起きたのかとびっくりしたと同時に、座っているのがほぼ自分だけという状況に気づくのにも時間がかかりました。

また、職場の有志で京都を旅した時のこと、満員のバスに子連れの妊婦さんが乗ってこられました。窓側に座っていた当時の私の上司(教育センター所長)が間髪入れず「こちらにどうぞ」と席を立たれました。通路側に座っていた私は状況把握が遅く席を立つのが遅れ、動く車内で妊婦さんを誘導するはめになりました。上司は、満員バスの中で誰か困っている人はいないか常に気働きをされていたのだと思います。

一畑電車で松江に通勤していたある日、電車がほぼ満員の時がありました。私の斜め前の乗客が荷物を置いていた座席スペースに無理やり座った若者がいました。私とは対面の位置に座った彼の荷物にはネームタグがついており、メッセージが添えてありました。「この子には障がいがあり発作を起こすことがあります。その際はちゅうちょせず119番するか母親の携帯に連絡をください」という内容だったと思います。席を譲るべきなのはなにも年配の方や妊婦さんだけではないと知ると同時に、母親がそのメッセージを書いた思いを想像しました。

震災後に何度か東北を旅し、自然な気遣いに癒されたことがあります。荷物を抱え列車を待っていると、旅人が長旅で座れるようにという思いからか、列の先頭にいた高校生が自分の場所と交代しますと声をかけてくれたことがありました。旅行者であろう夫婦に席を譲る地元の年配の女性グループを目にしたこともありました。

震災直後に東北旅行に誘われ断ったことがあります。理由は、「震災のあった東北にお金を落としてあげないといけない。だから旅行に行こう」と誘われたからです。「してあげる、してもらう」感じに違和感を覚えたのです。障がい者に対する合理的配慮の提供が求められています。しかし、「してあげる、してもらう」関係での提供では意味がありません。共生社会においては、自然に心からお互いを応援したり支援したり助けたりする関係が構築できないといけないと思っています。助け合い、励まし合い、支え合い… 合い(愛)のあふれる社会へ…

